

ドキュメント

進路指導

1

VOICE U M

2月19日の 7時間目、種子島高校の講堂では2年生全員を集めて「学部・学科研究自己申告書」の優秀作品に対する表彰式が行われていた。2年生全員が、といっても、1学年わずか100名余りだが、講堂の前半分のスペースに腰を降ろし、代表の生徒が読み上げる作文を静かに聞いていた。「自己申告書」とは、自分が志望する大学・学部・学科について、その学部・学科を選んだ理由、大学でなにを学びたいかなどを書き記したものだ。代表の生徒が、決して滑らかではないが一生懸命に作文を読み終えると、みんなの拍手が講堂に響き渡った。

表彰式の様子を進路指導部主任の藤崎恭一先生は、講堂の後ろの方で立つたまま見つけていた。先生が種子島高校に赴任したのは、3年前のことである。種子島は鹿児島空港から飛行機で40分ほどの距離だが、県南端の与論島や沖永良部島といった島々とは比べるというゆる離島ではない。にもかかわらず藤崎先生は最初にこの

地で教壇に立つたときに、「この生徒たちは街の高校生とは全く違う」と感じていた。おおらかで純朴で、まるで「二十四の瞳」に出てくるような子どもたちだな、と思った。

「でもね、赴任して授業を始めてからしばらくすると、純朴でおおらか、だけでは物足りなくなってきたんですよ。種子島は地理的には隔離された場所だから、子どもたちの興味・関心がどうしても小さな枠に収まりがちなんです。それにこの地でさえ、情報過多による困惑、過保護といった現在の教育環境特有の問題点も見られ、その結果、自立心や耐性といった点でなにか物足りなさを感じ始めたんです」

島内には大学も専門学校もなく、また就職先も少ない。高校卒業後は生徒のほとんどが親元を離れ、島に帰ってくる可能性も低い。そんなこともあって大人たちは、つい子どもに甘くなってしまうこともある。狭い視野で満足せず、もつと社会に目を向けられる人材を育てていきたい。藤崎先生はそんな思いで、赴任直後から進路指導に力を入れることになった。

赴任した当時は 種子島高校の進路指導は、進学校ということで入試対策に関するアドバイスが中心だった。しかし先生は、勉強一辺倒というやり方だけでは満足しきれないものを感じていた。鹿児島県は全体的に国公立大志向が強く、進学熱が高いといわれている。藤崎先生によると、「とにかく生徒に、勉強だけはきちんとしてほしい。高校が多い」とのこと。だが今は、勉強だけではなく

鹿兒島県立種子島高校 静岡県立浜松西高校

生徒の進路観を養成するための指導

鹿兒島県立種子島高校

学部・学科調査研究で進路意識を高め、生徒の世界観を広げる



生徒自らが積極的に進路について考え、入試についての研究も自主的に行っていくべき時代。そんな中で生徒に勉強だけをさせて3年間過ごさせるやり方では、これからは対応できなくなるのではないかと藤崎先生は考えていた。

そこで藤崎先生は、これまで赴任した高校で実践した進路指導に関する試みを、種子島高校でも展開してみたいと思うようになった。前任校では2年生、さらに持ち上がりで3年生のクラスを担当した。その生徒たちにグループで「学部・学科研究」をさせたところ、思った以上の効果が出たことがあった。これは、

学部・学科研究自己申告書の表彰式は2月19日に行われた。優秀作品に選ばれた生徒が自分の作文をみんなの前で読み上げた。

決して受け身ではなく、自発的な進路選択が生徒に求められる今、その動機づけをどのように行っていくかが問われている。生徒自身に「なりたいたい自分」を発見させ、そのプロセスを理解させることにより、進路観の養成を図る指導事例を紹介する



鹿兒島県立種子島高校進路指導部主任 藤崎恭一 Fujisaki Kouichi
昭和32年鹿児島県生まれ。
数学科担当。
私立鹿児島育英館高校教諭を経て、昭和62年より県立高校教諭に転身、平成7年より同校勤務。

生徒に自分が行きたい学部・学科を選ばせて、ここでなにが学べるか、そして将来の社会参加への道筋などを調べさせるというものだった。生徒たちは自分の夢を追い始め、熱心に受験勉強にも励んだ。大学名より学科中心の受験校選択が展開され、最終的にはクラス47名中ほとんどが国公立大に合格するという粘りを見せてくれた。

「大学でやりたいことを生徒1人ひとりが見つけたことで、受験勉強をするための大義名分が生徒自身の中に生まれただけじゃありませんか」

生徒による 学部・学科の調査研究と発表会を、2年生の1学期末から夏休みの時期に、学年行事としてやりませんか

藤崎先生がほかの教師にそう提案したのは、赴任してまだそれほど日がたっていないころのことだ。幸いなことに当時の2年生の学年主任は、藤崎先生の提案を評価して、積極的に推進してみようということになった。とはいえ、この新しい試みが短期間で全員共通に理解されることは簡単ではない。しかし時間的な判断もあり、学年担任の先生方と企画を進めていった。藤崎先生は、「この種のことば、論破するのではなく、まず実行して、その内容に共感してもらおう」と、熱心なスタッフを増やしていくしかない」と思っていた。事実、藤崎先生の思ったとおり、新しい試みは共感を呼び、「学部・学科調査研究」は学年行事として定着していくことになる。

種子島高校の「学部・学科調査研究」は、次



のよつな日程で進んでいく。まずインターハイ予選がひと段落した6月末に、調査研究の説明会がある。生徒たちは自分の関心に沿って各学部系統ごとに分かれ、「学部・学科の構成と内容」「講義内容」「適性」などをグループで調べていく。各グループには顧問の先生がついてアドバイスをする。そして何回かの原稿指導・修正を経たあとの7月の末に、2年生全員が参加して「発表会」を開催する。この行事の目的は、生徒たちに進路観を養わせるだけでなく、進路指導室に置かれている資料を使って興味・関心がある分野をどのように調べればいいのか、そのアプローチ方法を学ばせるということでもある。

藤崎先生は「この行事を成功させるには、いくつかのポイントがある」という。まずは生徒に情熱を語らせること。ただ単に学部・学科を調べさせるだけでは、解説書の丸写しになってしまう可能性がある。自分がなぜその学問をやりたいのか、その学問に取り組むことでなにを実現したいのか、みんなに感動的にアピールできるような原稿の作成を奨励している。そしてもう一つは、発表会を盛り上げること。発表会がつまらなければ、生徒たちには学部・学科研究はつまらかった、という思い出しが残らない。

ともしばしばという。

「もちろん生徒の中には、しらけた子どももいますよ。でもどんなにモラトリアムを繰り返している子どもでも、基本的にはよくなりたいたいと思っっているんですよ。進むべき道が見つかれば、どんな生徒だって乗ってきます。我々はそこを突いていくんです」

そもそも「学部・学科調査研究」がスタートする6月末の時点では、**進**

路指導室では「国公立大学ガイドブック」や市販の大学情報誌、さらに各大学から取り寄せたシラバス（授業計画書）も閲覧することができる。



だから生徒には「堅い発表ではダメ。なるべくおもしろおかしくやりなさい」と話す。

また、楽しくやる一方で、生徒たちにその学問の本質をつかんでもらうことも大切だ。そこで発表会の数日前に行われる練習会が重要になってくる。練習会では、生徒たちが作ってきた原稿に対して、教師の側が突っ込みを入れていく。例えば、教育学系統担当の生徒に対しては「そもそも人間にはなぜ教育が必要なの?」というふうに問いかける。生徒は慌てて図書館などで調べ、考えたあとで、「サルは生まれつきサルだけど、ヒトは教育がないと人間にならないからです」と答えたり、教育基本法にある「教育の目的」に言及したりする。そんなやりとりを繰り返していくうちに、生徒たちはその学問のエッセンスを学び取るというわけだ。

発表会

まるでクラスマッチや体育祭のように盛り上がる。生徒たちは、ほかの学部系統のグループには負けられないというライバル意識が働くのか、いろんな趣向を凝らしてくる。農学・水産学担当の生徒は、環境破壊や食糧危機の問題を取り上げ、飢えた子どもたちの写真を見せながら、「こういふ現状を解決するために、農学や水産学が必要なんです」と訴える。

それほど乗り気ではないという。それが自分のやりたいことを見つけ、みんなの前で表現する工夫をするうちに、どんどん夢中になっていくのだ。

第1回の「学部・学科調査研究」を経験した生徒たちは、平成9年春に母校を巣立っていった。そのうち国公立大の推薦入試合格者は13名あり、県内の高校でトップクラスの数字を記録した。彼らが出願時に書いた「自己志望理由書」を見ると、種子島の書由・アリモドキソウムシの研究を志望理由に農学部を受験した者など、自分の身近な興味・関心をベースにしながら、しかも社会的問題にまで目を配らせているケースが多い。「学部・学科調査研究」の成果は、推薦入試の合格者数に間接的に好影響を与えているともいえるだろう。「狭い視野で満足せず、もっと社会に目を向けられる人材を育てていきたい」という藤崎先生の思いは、確実に実を結びつつある。

9年度に入って

種子島高校では「学部・学科調査研究 発表会」に加えてもう一つ、新しい行事をスタートさせた。それが冒頭で触れた「学部・学科研究自己申告書」である。「自己申告書」作りがスタートするのは、12月初旬。夏はグループで学部・学科を調べたが、ここでは1人ひとりが自分の志望大・学部・学科を決め、志望のきっかけや大学でなにを学びたいかを、12月末の締切日までに書く。夏の時点で芽生えた各学問領域に対する興味を、個人研究でより深めることが目的だ。全員の申告書の中から優秀な作品を、生徒自身の

夏 休み中に行われるグループ発表と2学期末の自己申告書提出を通して、生徒は自分で進路について調べていく力を身につける。



た。医・歯・薬学系統担当の生徒は、実際に医師や薬剤師のところに取材に行き、そのシーンをコメント形式で楽しく再現した。発表会にはできる限り多くの先生に出席してもらっており、予想を超えた生徒たちの表現力に、教師自身が感動すること

手で選ばせ表彰するようになった。

今回の「自己申告書」の導入では、藤崎先生によると2学年のスタッフの情報と企画が原動力になったとのこと。9年度の2年生の学年主任は大倉野賢一先生。大倉野先生は当初、この行事が成功するかどうか半信半疑だったという。「実は私はこれまで、夏に行われる学部・学科調査研究の発表会さえ見たことがなかったんです。9年度2年生を受け持ち、初めて行事に参加しました。そこで生徒が授業中には見せないような表情をしている姿を見たときに、この試みの意義を感じたんです。受け身ではなく、生徒が自分で工夫してやっているという点がいんですよ。以来、自己申告書の試みについても、ぜひやるべきだと考えるようになりました」

9年度の「学部・学科研究自己申告書」作りでは、3人の生徒の申告書が優秀作品として選ばれた。中学2年生のときに英語の日記を書き始めたのがきっかけで英語に興味を持ち、将来英語を教える職業に就くために英語英文学を専攻したいという日高早紀さん。教師志望で、音楽を通して子どもたちと接していきたいという教育学部音楽学科志望の徳永弘恵さん。種子島にロケット発射基地があることから宇宙工学に関心を持ち、航空工学科を志望している長田幸太郎くん。実は彼らにも話を聞こうとしたのだが、3人ともはにかんでしまつて、流暢に答えてもらつていっわけにはいかなかった。だが3人の書いた報告書は、そのまま大学入試の「自己申告書」として提出しても恥ずかしくないくらいに雄弁なものであった。

生徒の
 進路観を養成する
 ための指導

極秘指令が

1年担任団から生徒たち
 に下った。「この夏休み
 あなたのあこがれの職業に就いている人にイン
 タビューし、極秘レポートとして提出すること」。

浜松西高校では3年間を通して職業観、進路
 観の育成をめざしたさまざまな取り組みが行わ
 れる。1年生が夏休みに行う「職業インタビュー」
 もその一つ。家族や親戚、近所の人でもだ
 れでもよい。今、自分が関心を持っている職業
 に就いている人を取材し、その人がどんな仕事
 をしているか、仕事に就くまでにどんな経過を
 たどったか、仕事の喜びや苦労はなにかなどを
 調査、報告する。

「調査結果を書き込む用紙に『極秘指令』と
 記されていることからわかるように、課題や宿
 題といった大げさなものではないし、まして点
 数をつけるようなものでもありません。無理の
 ない範囲で、わかる範囲でいいから聞いてきて
 ください」と、生徒にはいっています」と進路課の
 池田一志先生は語る。

どんな人に会うかは生徒の自由。小児科の医
 師にインタビューした生徒、名古屋空港の管制
 官に話を聞いた生徒、JRの工場で働いている
 人に会いに出かけた生徒もいる。

作業着姿の

男性が教壇に立ち、1
 年生たちにこれまでの

仕事を通して得たもの、今、社会で
 必要とされる人間像について自らの
 思いを語る。11月のLHRで行われ
 た「地域の方々との語る会」では、1
 年生の各クラスに1名ずつ、メーカ
 ーや金融、建築など、さまざまな地
 元企業の社会人が講師に招かれ、そ
 地



浜松西高校

3年間を

見通した多彩な指導で 職業観を育てる



静岡県立浜松西高校
 池田一志 Ikeda Kazushi
 昭和27年静岡県生まれ。
 英語科担当。
 進路指導主事。
 浜松西高校での指導は
 13年目を迎えた。

「高校に入って、職業について初めて自分で
 調べるのですから、詳しいことはわかりつこあ
 りません。ただ、働いている人から直接自分の
 耳で話を聞き、仕事の意義を実感することに価
 値があるんです。これから本校で、職業、進路
 について考えていくきっかけになればいいんで

それぞれの人生経験や生きた職業の話を生徒に
 聞かせる。社会の実態を生徒に伝えるため、浜
 松西高校では保護者までもが教壇に立つこと
 もある。

「最近では『自分の子どもとかなかなかうまく話
 ができない』という保護者が増えています。し
 かし、ほかの子どもに対してなら、意外にうま
 く自分の思いを伝えられるのでは、と考えたの
 です。進路課の宮崎貞夫先生はこの取り組みの
 きっかけをそのように説明する。LHR「父母
 と語る会」は2年生を対象に、PTAで選ばれ
 た保護者が各クラスに赴き、今の高校生に望む
 こと、社会で必要とされる人材などについて語
 る。この会でもどんなテーマで話をするかは講
 師が自由に考える。

「設計事務所勤務する方が、浜松駅前の再
 開発についてお話をしてくれたことがありまし
 た。そのLHRをきっかけに建築学や土木学
 などに関心を持った生徒が増えたように思いま
 す。現場の方の話だから具体的に、説得力もあ
 りますよね」(宮崎先生)

さらに1、2年次合同のイベントとして、大
 手企業のトップを招いての講演会も行われる。
 ある大手石油会社の研究開発部長が講師を務め
 たときは「富士山を一つの器としたら、地球上
 にはあとどれくらい原油が残っていると思いま
 すか」といった問いかけからこれからのエネ
 ルギー論が展開された。会場の生徒たちは自分
 たちが知らなかった世界に関心を示し、くいく
 い引き込まれていったという。



静岡県立浜松西高校
 宮崎貞夫 Miyazaki Masao
 昭和31年静岡県生まれ。
 物理科担当。
 浜松西高校に赴任して
 本年度で12年目を迎える。
 本年度、理系クラスを担当。

す」(池田先生)

あこがれの職業の発見をスタートに、次は仕
 事に就くのにふさわしい学部・学科はどこか
 その学部・学科はどの大学にあるのか、そして
 その目標に向かうためには自分には何をすれば
 よいのか……。浜松西高生たちが自ら動き、進

浜松西高校の進路指導の流れ

入学	地元企業の方々とのLHR 企業トップの方の講演会 地元小学生との交流
1年	職業インタビュー 大学教員による講演会 職業・学部研究
2年	企業トップの方の講演会 父母の方々とのLHR 生徒・保護者合同進路講演会 グループ別学部・学科研究 個別大学調べ 学力の自己診断 大学教員による講演会 大学生を囲んで 3年担任を囲んで
3年	卒業生アンケート 進路自己診断

10年後、20年後

までも見とお
 した自分の生き
 方について考えよう。浜松西高校の地域、保護
 者を巻き込んだ一連の進路指導のねらいは、す
 べてこの1点に集約される。文理選択や志望学
 部・学科選択、そして志望校選択といったシー
 ンでは、高校生はとかく目先のことがかりを気
 にしがちになる。科目の得意・不得意で文理を
 決め、偏差値がこのくらいだからこの大学……。
 しかし、進路選択で大切なのはあくまでも将来
 の夢の実現。池田先生、宮崎先生ともに特に1、
 2年次の段階は徹底した「夢作り」の時期だと
 とらえている。

「進路課としては2年次の終わりごろまで、受験や入試の話はほとんどしなくていいと思っています。社会に目を向けながら、じっくりと自分の将来について考えるようになればいいです」(池田先生)

最近の生徒気質の変化は、両先生ともに感じている。「自分のことを自分のこととして考えられない」「たくましさに欠ける」「子どもっぽい」。ほかの多くの教師と同じような生徒観を抱いていた。

「だからこそ、生徒が自分で考え、研究していくような場を設けたのです。生徒に『あなたたちが考えなさい』と、自分のことなだから自分で動かなきゃいけないことがわかれば、生徒は行動を始めるはずです」(池田先生)

地元企業の社会人、保護者との交流は、実社会を生徒たちに知らしめるためだけの取り組みではない。自分とは違う世界に生きる人との異世代間交流という側面も持っているのだ。自分の知らない世界に触れることは、生徒にとって逆に自分自身に気づきつきかけになるはず。浜松西高校の1年生は、地元の小学生とスポーツやゲームを通じた交流も行っているが、ある生徒はこの取り組みから「自分には人をまとめる

る力がまだまだ足りない」という自己分析をしている。こうして生徒たちは自己を知り、自分の未来像を形作っていく。

職業への関心

が芽生えたら、次はその職業に就くにはどの学部・学科が適当か、またその学部・学科はどの大学にあるのかを調べていく。1年次の「職業・学部研究」、2年次の「グループ別学部・学科研究」と、ここでもLHRを利用した指導がその役割を担う。

『グループ別学部・学科研究』は各クラスで志望学部・学科ごとにグループに分かれ、その学部・学科で具体的にどんな研究が行われているか、似たような名前の学科はどこが違うのかなどを約2週間かけて調べ、発表します。ここでは大学はどこどころが挙がってもしいいんです。難易度などは気にしないで、自分が興味を持った大学・学部・学科を挙げさせます」(宮崎先生)

11月になると「志望大学調べ」がスタート。大学の所在地から始まって、学風や教育方針、取得できる資格・免許、卒業後の進路、入試科目・配点まで、各自の志望校を多岐に渡ってレポートさせる。

進学校

なんだから

1年生のうちからもっと受験指導を徹底させた方がいいのでは……という考えを持つ保護者もいるかもしれない。だが、単なる進学指導、生徒にやらせる指導では、今の生徒はいつかきつと嫌になってしまつと先生たちは考える。

「生徒の意欲、自主性を尊重した指導こそ、受験生になってがんばられる生徒を育てるはず。現在の進路指導がほぼ固まつたのは5年前ですが、それ以前と今の生徒では、入試結果の面を比べてもよい結果を出しているんです」(宮崎先生)

浜松西高校ではセンター試験の受験者数、そして5教科型の入試対策を最後まで貫く生徒が着実に増えているという。池田先生、宮崎先生ともこの現象を、「1年次から自分の将来について考え、十分

進路指導室の見取り図とともに、どの資料でなにがわかるのかを、生徒にガイドする。初めての生徒でも十分進路指導室を活用できる。



1. 進路指導室の概要
2. 進路指導室の役割
3. 進路指導室の設備
4. 進路指導室の資料
5. 進路指導室の活動
6. 進路指導室のルール
7. 進路指導室の注意事項
8. 進路指導室の問い合わせ先
9. 進路指導室の連絡先
10. 進路指導室のその他

「調査内容は学風・環境や教育内容の特色から設置講座名や単位互換制度の有無まで、かなり細かい部分にまで及びます。そこで進路課では、生徒に対して調査の進め方をアドバイスするレジュメを作成し、進路指導室のどこにどのような資料

納得して自分の進みたい進路を選ぶことができているため、入試直前になって志望を変更して楽な入試に流れる生徒が減つたのでは」と分析する。生徒は着実に粘り強くなっているのだ。

学校、地域が一体となって、生徒の3年間を系統立ててサポートする浜松西高校の進路指導。実は、卒業生もこの中で大きな役割を果たしている。2年次の冬に行われる「大学生を囲んで」では、専攻学問ごとに分かれた卒業生たちが後輩たちの進路選択や受験勉強に関する質問に答える。この時期、2年生はほぼ志望学部・学科が固まつており、先輩たちに受験勉強のポイントや大学生活の様子などを積極的に質問する。

浜松西高校では卒業を目前に控えた3年生に自分自身の高校生活の反省、そして母校の進路指導に対するアンケートをとる。進路の決定時期は、どんな資料が役立つか、なにを重視して決めたかなどを調べ、次年度以降の指導に役立てる。

「生徒の進路決定時期が全体的に遅いようなら、それぞれの行事の実施時期や内容を見直ししていくことになります。また、アンケートでは後輩へのメッセージも書かせていますが、やっぱり授業中に眠るヤツは落ちた！ だってオレがそうなんだから！」なんていうものもありますよ。こんな先輩の声を授業中に生徒に紹介すれば、後輩にとってはすごく説得力がありますよね」(池田先生)

学内、学外を問わず、さまざまな人がさまざまな形でかかわる3年間の指導は、生徒にたくましさとして人生を見通す力を与えているのだ。



校時代は、これからの人生を決めていく素晴らしい時期。生徒には思う存分考え、悩んでもらいたい。と池田先生は語る。浜松西高校のさまざまな取り組みは、そのきっかけ作りなのだ。